

HOKUSEI REVIEW

THE SCHOOL OF HUMANITIES

Vol. 38

March 2001

- The Wizard World of Harry Potter : Analyzing the
First Four Books of the Harry Potter Series Peter GRAY ... 1
- Exploring Prosodic Modality in Japanese
Disagreement from a Perspective of Register Shoji TAKANO ... 13
- The Essence of Courtroom Drama : An Analysis
of *The Trial of the Catonsville Nine* Katsuyori TAKAHASHI ... 33
- A Consideration of F. Fröbel's
Educational Theory in the Meiji Era Reiko SAKAI ... 41
- Henry Corbin et l'idée du
"dépôt divin confié à l'homme" Mikio KAMIYA ... 63
- The Relationship between Physical Fitness and
Health in University Students (Part 2) :
Introduction of Simple Fitness Tests Yutaka MINOUCHI ... 73
- The Universal Recognition Process of Music and the
Possibility of Cultural Differences in Music Schema Yasuhiro GOTO ... 81

Notes & Discussions

- Marketplace Membership as a Variable Outranking
Gender : Further Evidence from 1999 Tokyo Fieldwork Shoji TAKANO ... 95

Translations

- The Letters of C.L. Dodgson
to the House of Macmillan (5) Kumiko TAIRA ... 107
- Homer's *Iliad* Book XXII (a translation) Toshimitsu TANAKA ... 152

HOKUSEI GAKUEN UNIVERSITY

3-1, Oyachi Nishi 2-chome, Atsubetsu-ku, Sapporo, Hokkaido, Japan

日本人の言語交渉における対立意見表明の韻律モダリティ¹

—— レジスター研究の視点から ——

高 野 照 司

I. はじめに

日本社会は世界でも類いまれな「等質言語共同体」として言及されることが多く、誤解や意志疎通の断絶などとは無縁であるかのようなイメージが与えられている。また、個人の立場や見解よりも集団の方針・利益を尊重するという国民性が殊更に強調されるため、対人関係や組織において、「協調」や「調和」を最優先させるステレオタイプの日本人像が作り上げられてきたと言っても過言ではない。社会言語学の骨格をなすポライトネス理論 (Brown & Levinson, 1987) が、日本社会を「消極的面子」(“negative politeness”) 志向文化の模範型 (“prototypical”) として挙げていることから明らかなように、対人コミュニケーションにおける不和や争いを忌み嫌う、「丁寧で婉曲的な」日本人の言語使用は、世界的にもよく知られているところである。

しかしながら、日本人の言語運用に関するこうした画一的解釈により、西欧社会では盛に行われている「口論」の研究 (Brenneis, 1988) において、日本語社会言語学は著しく遅れをとる結果となっていることは否めない。現実の様々な生活場面で当然のことながら遭遇する意見の対立や食い違いを、我々はいかに表明し、「調和・協調」の理念へ向け、どのような解決策を講じているのだろうか。これまでに日本人談話における「意見衝突」を扱った研究は、ごく少数の先駆的なものに限られており (Niyekawa, 1984; Yamada, 1992; Mori, 1999; Jones, 1995, in press)、そのメカニズムについての理解をより一層深めるためには、分析対象とする言語変項 (variable)、生活場面ごとのレジスター (使用域) や性別・所属社会階層等の話者属性との相関、心的距離や力関係といった談話参与者間要因などを考慮に入れた、多角的アプローチが試されるべきであることは言うまでもない。

以上のような背景をふまえ、本研究では日本人談話における対立意見表明の手続きについて、特に、以下に論ずる四点に着眼しながら考察を加えたい。

まず第一に、本研究の理論的後盾としての言語変異理論 (Variation Theory) (Labov, 1972) とその方法論を採用することで、日本社会の「異相混合的」言語共同体像を浮き彫りにしたい。言語変異理論において言語共同体は、「規則性を内包する多様性 (systematic variability)」を有するものとして解釈される。筆者が拙稿 (Takano, 2000b) で主張したように、

¹ 本研究は文部省科学研究費補助金・奨励研究 A11710288 号 (平成11~12年度支給) の一環として行われた準備研究の成果報告であり、社会言語科学会第6回研究大会 (2000年9月、中京大学) におけるワークショップ「社会・文化的認知と談話分析の新たな視界」でのパネリスト発表を土台としている。

「神話的」とも言える日本社会の「均質的」言語共同体像は、1) 従来の社会言語学的研究の多くが、言語運用の規則的変異の探究に不可欠な「自然発生的談話」に取り組むのではなく、母語話者の比較的均質な「内省」を分析の主な拠り所としてきたこと、2) 言語共同体内における小集団(subgroup)ごとの規則変異には目を向けずに、標準語話者、即ち、中流階級に属する東京方言(特に、山の手地区の)話者のみを日本語母語話者の「典型」として調査研究してきたことなど、方法論上の相違点から派生した産物であると言える。言語変異理論に則り、言語共同体の中に生きる、様々な社会背景をもつ構成員からの自然発生的談話を分析対象とすることで、多様かつ規則的な言語共同体の実像が浮かび上がってくるものと思われる。

本研究における第二の着眼点は、韻律(Prosody)研究と談話研究のインターフェースにある。実験音声学や音調音韻論においてこれまで盛んに行われてきた伝統的韻律研究が、韻律をその使用コンテクストから切り離し、内省に大きく依存したアプローチをとる一方、Couper-Kuhlen & Selting (1996) や音声文法研究会編(1997, 1999)に代表されるように、韻律の機能を「自然談話」の中で捉える観点が、近年注目を集めている。そこで明らかになってきたことは、韻律の顕われ方とその使用コンテクストとのダイナミックな相互作用、即ち、話者が使用コンテクストの中味を瞬間ごとにどう捉えるかによって、多様でありながら、極めて規則的な変異を韻律が示すという事実である。

日本人の「意見衝突」に関する先行研究(Jones, 1995, in press; Yamada, 1992; Takano, 1997など)では、会話分析的アプローチが主流となっている一方、本研究では、分析対象とする言語変項(Variable)として、対話者の積極的面子を脅かす(positive-face threatening)否定表現(打ち消しの「—ない」)における韻律の変異性に注目する。先行研究では、意見衝突に直面した日本人が採用するであろう面子維持にむけての「談話的ストラテジー」(例えば、衝突の隠蔽、意図の正当化または曖昧化、心的距離・連帯意識の調整など)が徐々に明らかにされてきている。そのようなストラテジーに加え、本研究では、聞き手の面子侵害の程度が特に深刻な否定行為に付与される韻律変異を、意志伝達のモダリティ(発話内容に対する話し手の心的態度)(中右, 1999; 仁田1999)の表出として位置付け、その使用コンテクストとの密接な相関を明らかにしながら、「韻律的ストラテジー」の可能性を探りたい。

第三の着眼点として、言語共同体内の様々な生活場面から採取した自然発生的談話資料をもとに、従来よりも広範囲にわたるレジスター(言語使用域)を分析対象としながら、当該言語事象のより巨視的な説明を試みる。このような「レジスター間変異」への観点は、従来の言語変異研究においては比較的軽んじられており(Biber & Finegan, 1994)、特に日本語に関する研究成果は皆無に等しい。

当然のことながら、婉曲的で丁寧な物言いを好むとされる日本人が、生活場面全般にわたって常に「意見衝突」をタブー視し、それを回避するわけではない。むしろ、「内・外・表・裏」といった日本文化特有の対人関係領域ごとに、正当または適切とされる対立意見表明のあり方が異なっていると言える(Ishida, 1984)。例えば、テレビ討論会のような場面では、互いに「外」関係しか持たない論客同士が、「表」舞台(=公衆の面前)であからさな批判をすることは社会的に適切である一方で、放送前の楽屋やコマーシャル中で放送がされていない場面(=「外」関係の「裏」舞台)では、同一論客が他者の対立意見に柔軟な姿勢や妥協的見解を示すという一見矛盾した行動は起こりえないことではない。また、会社間折衝のような場面、つまり、「内」関係を持つ出席者(=会社の同僚)が「表」舞台(=他会社との会合)におい

て、自社の方針への個人的な対立意見を表明することは社会的に許されないが、いざ、交渉後の内輪での飲み会へ場面(=「内」関係の「裏」舞台)を移すと、部下が上司に対して反対意見を本音として語ることは不自然なことではない。

以上のように、様々な生活場面(=レジスター)からの自然発生的談話資料を分析することで、意見の対立に直面した日本人の言語使用について、「国民性」や「文化的エトス」などといった大雑把な説明では賄いきれない、言語共同体の複雑な現実が明らかになるものと思われる。先行研究ではどれも単一のレジスターのみを扱っており、その検証結果をもとに、意見衝突場面における日本人の言語運用を一般化するには限界がある。

第四の着眼点として、日本人の対立意見表明における韻律の変異性について、言語共同体内の社会的な小集団(subgroup)に光をあてた分析を試みる。上述のように、極端な「標準語話者」志向の日本語社会言語学は、その他の「非標準的」小集団をこれまで研究対象としてこなかった。主に西欧社会の事象から言語変異研究が明らかにしてきたものは、一言語共同体内には言語を通して固有のアイデンティティを維持し主張する様々な subgroup が存在し、言語共同体自体の多様性はまさにそういった社会的営みの帰結だとする解釈である。

本研究では、日本社会における性役割の変化に伴い、近年増えつつある「女性管理職」なる subgroup の言語使用に注目する。日本社会において女性は、文化的美徳とされる丁寧で婉曲的なことば使いを貫く集団という社会通念が浸透している(真下、1969)。従って、他者との見解や立場の相違をあからさまに表明することは、女性の伝統的「もの言い」とは相対するものであり、社会生活の中でその伝統を敢えて破らなければならない立場にいる管理職の女性たちにとっては、言語運用上の「ジレンマ」となっている(Reynolds, 1990)。女性管理職の職場での自然談話を分析資料に含めることにより、見解の相違や意見衝突のある場面で、韻律的モダリティがどのようにジレンマ克服に寄与しているのかを検証する。そうすることで、日本という言語共同体の異相複合的な「実像」が浮き彫りになるものと思われる。

II. 否定表現の韻律変異と相互作用的(interactive)要因

否定表現に付与される韻律変異の規則性を説明する上で、二つの有効な原理がこれまでの研究成果から明らかになっている。一つは「Cognitive Prominence Principle」(以下、CPPと略す)(Yaeger-Dror, 1997)と称される認知的原理である。この原理によれば、否定表現は聞き手にとっての新出情報を提供するため、その新出情報には一般的に、フォーカルプロミネンスとしての韻律的卓立、即ち、ピッチ強勢(pitch prominence)、音の時間長(duration)、音声パワーの増幅(high intensity)が加わるとされる(e.g., Prince, 1981; Brown, 1983; O'Shaughnessy & Allen, 1983; Nooteboom & Kruijt, 1987; Hirschberg, 1990)。しかしながら、これらの実験音声学的研究では、自然発生的談話を分析対象としていないのが常で、韻律の果たす「相互作用的」(interactive)機能との相関で変異を捉えようという観点が欠如している。

もう一方の「Social Agreement Principle」(以下、SAPと略す)と称される原理(Yaeger-Dror, 1997)は、我々の実生活における「会話」という行為は、根本的に対話者との意見の相違をできるだけ解消し、合意や統一見解に到達するための協調的営みであるという立場をとる(Schegloff, et al., 1977)。この原理によると、否定表現を用いることは潜在的に聞き手の

面子を脅かす行為であり、話者は進行する会話のなかで、その瞬間毎に面子侵害の程度を見積る。この面子保全のためのSAPは、上記の認知的理由（即ち、新出情報が否か）に基づく調整に優先するとされ、その結果、自然談話における否定表現のフォーカルプロミネンスが、C CPの予測する以上に多様であることが、Yaeger-Dror (1985 1996 1997) などの米語を対象とした社会言語学的研究により明らかにされている。

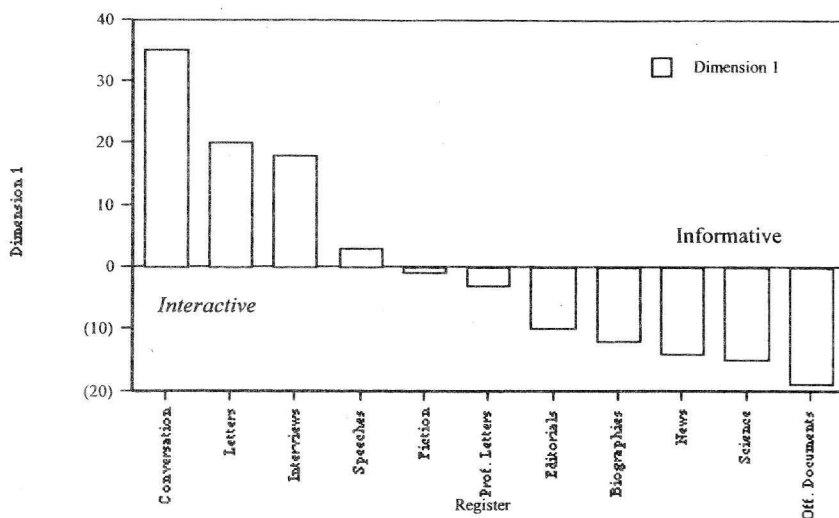
したがって、使用コンテキストに根ざした相互作用的な韻律調整の規則性は、以下のような観点でまとめられる。

1) レジスターの相互作用的特性 (Biber, 1988)

我々は日常生活の場面ごとに「適切」とされる言語特徴を取捨選択しており、Finegan (1994) によるとレジスターは、上記の「情報伝達志向性」(“Informative”)と「相互作用志向性」(“Interactive”)の連続体を成しているものとして捉えることが可能である(グラフ1)。²

グラフ 1²

Interactive-Informative Registers
(adapted from Finegan 1994: 389)



話しことばのみに着目すると、比較的 informative なレジスター、具体的には、討論や講演といった情報伝達の効率性が対人面子維持よりも優先するレジスターにおいては、CPPが効力を発揮し、「否定」韻律はフォーカルプロミネンスを帯びやすいことが予測できる。それに比べ、interactive でSAPがより強い影響力を持つレジスター、例えば、初対面での会話や友人同士の日常会話といったレジスターでは、情報伝達機能よりも話者間の共感や連帯意識が尊重され、話者が相互の面子保全に敏感であるが故に、「否定」韻律にフォーカルプロミネンスは与えられにくいことが予測されるのである。

² Dimension 1 とは言語的特徴を指す。否定表現に関して英語を例に説明するならば、レジスター特性が“interactive”（相互作用性優先）であればあるほど、対話者の面子に少しでもダメージの少ない否定縮約形 (don'tやdidn'tなど) の頻度が増え、“informative”（情報伝達性優先）なレジスターほど、否定情報を明確に伝えるために非縮約形 (do notやdid not) が用いられる。

2) 否定表現の相互作用的意味タイプ

自然談話の中で発生する個々の否定表現の相互作用的意味は、その使用コンテキストからいくつかのタイプに分類することができ、韻律変異の規則性を説き明かす上で、極めて重要な役割を果たす (Yaeger-Dror, 1997: 6-8)。主なものとして、

- a) 直接的威嚇型——相手の発話内容を真っ向から否定することで、相手の面子を直接的に脅かすタイプ。

話者A: 福祉やなんかの部分で9兆円吸い上げた。それがね、やっぱり、景気が悪くなった、これ、大きな原因でしょ。

話者B: いやあ、ある程度原因あるけど、あの、それが、あの、戦後ですね、あの、何十年来というような、そんな不景気の原因じゃないと思います。

これはテレビ放映された男性政治家A、B間での討論からの抜粋であるが、話者Bが先の話者Aの発話内容を真っ向から否定している（下線部）。

- b) 面子中立型——相手に直接関わりのない内容を否定することで、相手の面子脅威にはならないタイプ。

（公共事業に関する討論のなかで）

話者A: それから、アメリカでもですね、あの、ノースダコタみたいな、人の通らないような、という怒られるけども、ほとんど人口いないような地域のですね、とこにも、みごとなハイウェイできてますね。

同じ討論からの例であるが、二つの否定行為は共に、対話者の面子に対して中立的な情報を否定するものである。

- c) 対話者支援型——相手の発話内容を真っ向から否定したとしても、その否定行為自体が相手の立場を支援する役割を果たすタイプ

話者A: 各案内所でそれを企画してみるってこともね、いや、今すぐっていうことじゃなくて、まだそういう連携はできていないわけだから、

話者B: ええ、そうですね。

話者A: ただ、その、市の観光案内との連携、とろうと思えばとれるよね。

ある職場の幹部会議の席で、一人の部下（話者B）の統括する部門が、本来果たすべき役割を十分に果たしていないのではないかという意見が、複数の上司から出された。最高責任者である女性管理職（話者A）が、それは統括する者に責任があるというよりも、他部門との連携の欠如という組織機構自体に問題があるとして、話者Bの立場

³ 対話者の発話内容を直接的に否定しながら、相手の立場を支援する否定行為の好例は、本研究資料では発見できなかったが、例えば、以下のようなやりとりが考えられる。

1) 話者A: おれ、足遅いから。 話者B: 遅くないって。

を擁護している。³

上記の二原理から予測される変異パターンとして、直接的威嚇型(a)では、SAPの重視から韻律のフォーカルプロミネンスが最小限に抑えられる一方、対話者支援型(c)では、その積極的活用が、会話参加者間の連帯を強める上で有効であると認識されうる。面子中立型(b)では、CPP志向により比較的高い割合でフォーカルプロミネンスが観察されうるという予測が成り立つわけである。

Ⅲ. 面子威嚇行為と話者属性

上述のように、日本社会においては話者の性別によって、面子威嚇行為の社会的意義や評価が多様である。特に、丁寧・婉曲という社会文化的な言語運用規範の遵守を求められる女性にとっては、当該言語行為は深刻な問題となりうる(寿岳、1979)。筆者が他論考(Takano, 1997)で行った女性管理職の職場における「命令表現」の研究では、特に、部下が上司の命令意図に対して協調的でない状況、つまり見解の相違が生じている言語交渉場面において、上司は互いの面子を保つための特殊な「談話ストラテジー」(例えば、呼びかけ表現の工夫、命令意図の正当化または曖昧化、ユーモアの使用、スタイルの変換など)を開発し、協調的関係を維持させながらも、命令意図の円滑な実践のために活用していることが明らかになった。その延長線上にある本研究では、否定表現「-ない」の韻律変異を言語交渉のコンテキストから派生する意志伝達のモダリティとして捉え、その方策的側面、即ち、「韻律ストラテジー」を特に女性管理職の言語運用に注目して検証する。

Ⅳ. 分析資料・分析方法

本研究では、三種類の異なる自然発生的レジスターを資料として分析する。

1) 討論レジスター (Debate)

テレビで放送された政治討論番組をビデオ収録したもので、2名の男性政治家が男性司会者を挟んで、一対一で約1時間にわたり討論をしている。

2) 職場レジスター

六つの異なる職場での自然発生的言語交渉をオーディオテープに録音した。そのうちの四つは、いわゆる女性管理職(各1名)を中心とした部下とのやりとりで、残りの二つが男性管理職を中心としたものである。職場レジスターはその脈絡的特徴から、さらに3種類のレジスターに再分割して考察する。

2(a) - 職場での会議 (Meeting)

2(b) - オフィスでの仕事上の会話 (Office)

2(c) - オフィスでの仕事とは関係のない無駄話 (Chats)

3) 日常会話レジスター (Casual Conversation)

親しい友人同士の同性間会話一組をオーディオテープに収めた。20代女性二人が一対一で約1時間の会話を行っている。

本研究の研究目的から、相互交渉の社会的脈絡(コンテキスト)の正確な把握が必須であるため、できるだけ研究者自身が会話場面の観察記録をとった。それが可能でない場合には、録

音を依頼し、録音終了後、必要な情報を会話参加者（主に、各職場の管理職）から聴取する手法をとった。

ここで注目すべきは、本研究資料の特性として、1) - 2 a)- 2 b)- 2 c)- 3) の順に、「情報伝達志向 (Informative)」～「相互作用志向 (Interactive)」の連続性を形成するレジスター群として捉えられることである (図1)。

図1

本研究の分析対象レジスター

INFORMATIVE				INTERACTIVE
1) Debate	2 (a) Meeting	2 (b) Office	2 (c) Chats	3) Casual Conversation

表1は、韻律分析に含めた打ち消し「-ない」の個数を、レジスターごとにまとめたものである。分析には Pitchworks という音声分析ソフトを使用し、「-ない」に付随するピッチ強勢 (pitch prominence) と音声パワーの増幅 (high intensity) の二基準から、韻律卓立の有無を判定した。⁴ なお、ピッチ強勢と音声パワー増の両面が確認された場合の卓立と、どちらか一方しか観察されなかった場合の卓立とで、両者間の程度の差も分析に役立てることにした。

表1

韻律分析に含めた打ち消し「-ない」の個数

1) 討論 (Debate)	70
2 (a) 職場での会議 (Meeting)	204
2 (b) 仕事上の会話 (Office)	282
2 (c) 職場での無駄話 (Chats)	101
3) 日常会話 (Casual Conv.)	96

計 753

「付録」には、韻律的卓立が「無」と判断された打ち消し「-ない」 (sample pitch.ptk) の例と、「有」と判断された例 (sample pitch 2.ptk) をそれぞれ挙げてある。前者については、「なかったんです (NAKATTA n desu)」部分のピッチ (Hz) はほぼ平坦で、音声パワー (二段目) も他部分と比べ、特に際立った厚みや幅、あるいは濃さを示していない。一方、後者については、「わからない (WAKARANAI)」部分のピッチが突然の顕著な隆起 (特に、「-らない」部分) を見せている。音声パワーについても、他部分よりも特に幅と厚みにおいて際立っているのが分かる。

⁴ 韻律卓立は他に、音の時間長 (duration) によっても識別されるが、この基準は本研究では考慮に入れなかった。

V. 分析結果および考察

韻律調整とレジスター相関

表 2 には、5つの「レジスター」ごとに、打ち消し「ーない」に与えられた韻律的卓立の割合を、「相互作用の意味タイプ」別に示してある。⁵

表 2
韻律的卓立におけるレジスターと相互作用の意味タイプの相関変異

[レジスター]	否定の相互作用の意味タイプ			計
	直接的威嚇型 (FTA)	面子中立型 (Neutral)	対話者支援型 (Supportive)	
討論 (Debate)	69% (27/39)	59% (13/22)	50% (1/2)	65% (41/63)
会議 (Meeting)	52% (31/60)	45% (56/125)	67% (10/15)	49% (97/200)
仕事上の会話 (Office)	43% (37/87)	43% (73/169)	59% (13/22)	44% (123/278)
職場での無駄話し (Chats)	29% (6/21)	46% (26/57)	75% (6/8)	44% (38/86)
日常会話 (Casual Conv.)	27% (6/22)	40% (24/60)	100% (4/4)	40% (34/86)
計	47% (107/229)	44% (192/433)	67% (34/51)	47% (333/713)

否定「ーない」に韻律卓立が与えられる割合は、全体として47% (333/713) であるが、レジスター間の差異 (65%~40%) が存在するだけでなく、それ以上に、相互作用の意味タイプとの相関において、極めて顕著なヴァリエーション (100%~27%) が確認できる。

レジスター間変異については、先に論じたレジスターのもつ相互作用的特性との関連で説明できる (図 1 参照)。即ち、ある特定のレジスター運用において、話者が情報の効果的伝達を重んじるのか、あるいは、対話者に対する面子侵害の程度に気を配るのかによって、否定行為に内在する二つの原理 (CPP、SAP) が韻律的卓立の顕在化に影響を及ぼしている。情報伝達の効率性が相手を論破する上で重要となる「討論」の場 (65%卓立) においては、聞き手にとっては新出である「否定」情報の効果的伝達にむけ、韻律がCPPに則った役割を果たしていると言える。それとは対照的に、情報伝達の効率性よりも、対話者との調和的關係を重んじる日常会話 (40%卓立) においては、話者はSAPに敏感に反応し、韻律を通して「否定」行為に潜む面子侵害の危険を回避する方策を講じていると言える。頻度の差としては大きいものではないが、職場内における3種類のレジスター間変異についても、ほぼ同様の説明が当てはまるのではないと思われる。同僚間の連帯よりも情報伝達の効率性や建設的議論を重んじる「会議」のような場面では、韻律的卓立が比較的頻繁であるが (49%卓立)、協調性・調和的關係の構築も疎かにはできないそれ以外の職場レジスターにおいては、若干ではあるがSAP寄りの変異を示していると言える (仕事上の会話：44%、無駄話し：44%卓立)。

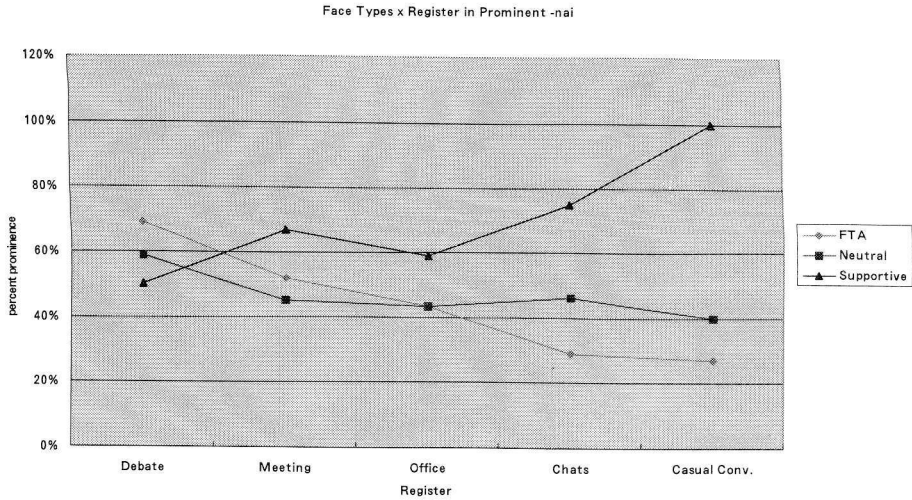
次に、これらのレジスター特性と相互作用の意味タイプとの相関変異を詳しく見ていきたい。先に指摘したように、韻律卓立の付与割合において、100%から27%までという大幅な変異が確認できる。この変異現象にどのような規則性が介在しているのか、グラフ 2 を見ながら考察

⁵ ここで注目している3種類の相互作用の意味タイプに属さない種類の否定「ーない」が40個確認されたが、本研究の分析には含まれていない。それらには、自己擁護的否定 (self-protection)、自己卑下の否定 (self-denigration)、自己修正的否定 (self-correction) などが含まれており、意見衝突場面における各々の相互交渉的意義については今後の研究課題とする。

することにする。

グラフ 2

韻律的卓立におけるレジスターと相互作用的意思タイプの相関変異



グラフ中の■線が面子中立型、◆線が直接的面子威嚇型、▲が対話者支援型の否定韻律への卓立付与の割合を示している。面子中立型否定(■)に関しては、相互作用的特性が異なる5つのレジスター間で、卓立付与の割合に大きな差は認められない。しかし、対話者の面子を直接的に侵害する否定行為(◆)に関しては、SAPが予測するように、interactiveな側面(対話者の面子保全)が重要視されるレジスターに移行するにつれ(Debate → Meeting → Office → Chats → Casual Conversation)、卓立付与の割合が着実に減少している。

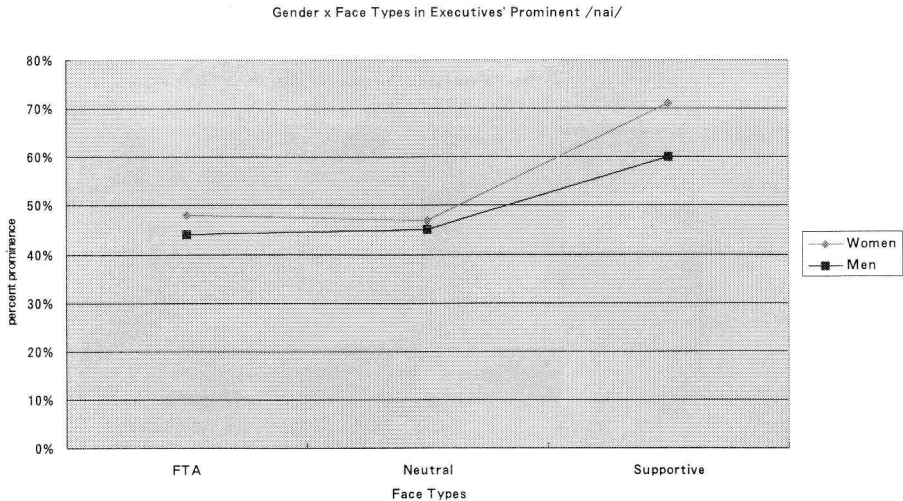
同様に、対話者支援型の否定韻律の変異(▲)についても、特に「職場での無駄話」(Chats)と「友人同士の日常会話」(Casual Conversation)において、相互交渉におけるSAPの重要性が再確認できる。直接的面子威嚇型の変異パターンとはちょうど逆行するかたちで、interactiveなレジスターになるほど、韻律的卓立が対話者間の友好関係や親密さを深める手だてとして活用されているのが見てとれる。

韻律調整と話者属性としての性差

これ以降は、職場レジスター(2(a). Meeting; 2(b). Office; 2(c). Chats)に分析の焦点をしばって、否定韻律変異に内在する話者属性としての性差を検証する。グラフ3では、管理的肩書きを持つ話者からの自然発生的談話を前節と同様に分析し、そこで得られた否定韻律の卓立変異を男女別に示してある。

グラフ 3

管理職による否定韻律の卓立変異：男女差



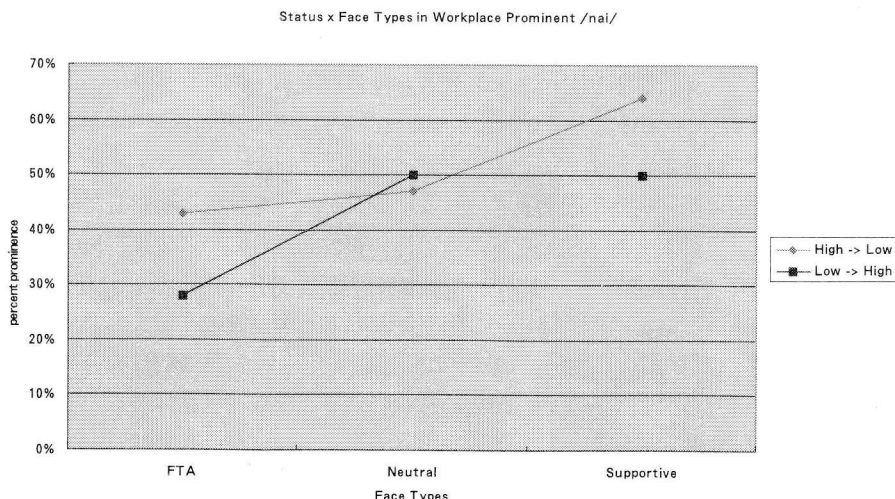
予想に反し、言語運用上の「ジレンマ」を感じているとされる女性管理職は、直接的威嚇型否定（FTA）においても男性管理職と同程度に（または、微量ではあるがそれ以上に）、韻律的卓立を用いていることが観察される。また、その割合において、面子中立型否定（Neutral）のそれと比べほとんど差がないのは、性別に関わりなく、管理的立場で職務を遂行する者として、部下の面子維持へのSAP的配慮よりも、重要情報伝達の効率性に重きを置くCPP的韻律調整を、敢えて行っていることが推察できる。

一方、女性管理職特有の変異として挙げられるのは、部下との連帯や協調を高める方策として、対話者支援型否定（Supportive）における韻律的卓立を積極的に活用していることである。特に、女性に対話者の積極的面子（positive-face）に訴えながら「親密さ」や「繋がり」を重ねる会話構築をするという傾向は、Tannen（1990）などでも指摘されている。また、女性管理職の談話研究から、職階差から派生する人間関係の溝を極力埋めながら、部下の協調性や自発性を引き出すような言語運用を行っていることも明らかになっている（Troemel-Ploetz, 1994; Takano, 1997）。

話者属性と韻律変異との規則的相関に関して、さらなる検討を加えていった結果、グラフ 4 で明らかなように、会話参加者間の職階からくる「力関係」が否定韻律変異に内在する規則性を説明する上で特に重要であることも分かった。

グラフ 4

職場レジスターにおける否定韻律の卓立変異：会話参加者間の力関係



まず、直接的威嚇型否定（FTA）における韻律卓立の割合において、職階が「上の話者から下の話者へ」の発話（◆High → Low）と「下の話者から上の話者へ」の発話（■Low → High）とでは、顕著な差異があることが分かる。管理職から部下への卓立割合は、面子中立型（Neutral）の割合と近似を示しており、上述のようなCPP志向の解釈が適切であろう。それとは逆に、部下から管理職への発話における低い割合の卓立使用は、典型的なSAP的面子維持措置の結果と解釈できる。

一方、対話者支援型否定（Supportive）における管理職の積極的な卓立使用（◆値）は、管理的職責を持つ者が身につけるべき対人関係スキルと深く関わっているように思われる。Pearson（1988, 1989）の社会的地位の異なる話者間での談話分析によると、地位の低い者から敬われる権威者は、ただ権威を振りかざし、常に威圧的な言語運用をするのではなく、必要に応じて率直で力強い物言いができる一方で、自己の権威を謙遜したり、部下を煽てるなど、二律背反的な言語運用を巧みに使い分けることのできる話者であるという。グラフ4で示されている、直接的面子威嚇型否定と対話者支援型否定の両タイプにおける韻律的卓立の活用は、こうした権威者特有の言語運用の反映として捉えることができるのではないだろうか。

以上の結果から、社会文化的に婉曲的で柔らかな物言いを求められる女性話者が、単純にその規範に沿った言語運用をしているとするのは短絡的かつ「神話的」解釈であり、現実の自然発生的言語運用においては、むしろ性別に関わりなく、個々人が日常生活の中で担っているより切実な社会的役割やアイデンティティに根差した韻律調整が行われている様が明らかになった（Eckert & McConnell-Ginet, 1992）。さらには、従来の女性語研究では、日本女性（そして、日本人全般）の「消極的面子」志向の丁寧さ（negative politeness）に議論が集中していた向きがあるが、女性（そして、日本人全般）の否定行為（または、言語生活全般）における「積極的面子」活用の対人関係的意義も、今後の研究では重用視されていくべきであろう（Takano, 2000a）。

女性管理職による韻律ストラテジー

前節では、予想に反し、女性管理職が直接威嚇的否定韻律の卓立を控えめに抑えているわけでは必ずしもない、という事実が明らかになった(グラフ3参照)。では、社会文化的に期待される「丁寧で婉曲的な」物言いと、職業的立場から求められる「権威ある、力強い」言語運用との間で「ジレンマ」を感じているとされる女性管理職が、そのジレンマに対し、一体どのような克服策を講じているのであろうか。本節では、その克服ストラテジーを韻律モダリティーに求め、検証していくこととする。

以下では、性別に基づいた集団データではなく個人データを詳細に検討していく。また、職場レジスターを、管理職と部下間で意見の食い違いが表面化している局面(Face-threatening Phase, 以下、FT Phaseと略す)と、そうではない局面(Non-face-threatening Phase, 以下、Non-FT Phaseと略す)に大別し、二局面における否定韻律の「個人内変異」を観察することにした。談話資料の中に両局面が含まれていること、また、数量的比較分析を行う上で、ある程度の個数の打ち消し「ーない」が用いられていることなどの条件から、6名の管理職の中から女性2名(Spk A, Spk B)と男性2名(Spk C, Spk D)を分析対象として抽出し、参考資料として先の討論レジスターにおける男性政治家2名(Spk E, Spk F)も分析に加えた。

以下は、他要素へのフォーカルプロミネンスの可能性を示すための談話例であるが、

「あの映画 は きっと おもしろくない から、……」

ここでは、否定部分(「おもしろくない」)に韻律的卓立が加わる以外に、計4ヵ所の下線部語彙にフォーカルプロミネンスとしての韻律的卓立が与えられることは可能である。

分析の結果明らかになったことは、特に意見衝突が深刻化するFT Phaseでの女性管理職の否定行為においては、打ち消し「ーない」の韻律卓立と同アクセント句内における他要素へのフォーカルプロミネンスの相関パターンが、男性話者のそれと顕著な違いを示したことである。⁶

なお、上で言語変項「ーない」と「同アクセント句内」と述べたが、これはToBI(Tones and Break Indices)と称する日本語韻律の記述システム(キャンベル、1997)に則った概念で、本研究では新たな意味単位が始まるとされるピッチレンジの「リセット」が起こるまで(Break Index 3)を同一アクセント句とみなして分析した。「付録」の例で説明するならば、sample pitch.pkでは「ま、グラマーパーツはたいしたことなかったんですけど」までを、sample pitch 2.ptkでは、「読んで分からないってゆうの、結構あるんじゃないかとは思うんです」までを同一アクセント句と捉えている。

表3は、FT PhaseとNon-FT Phaseにおける否定「ーない」と同一アクセント句内で観察された他要素へのフォーカルプロミネンスの割合を話者ごとにまとめたものであり、続くグラフ5はそれを図示したものである。

⁶他の発見として、FT Phaseにおける否定韻律卓立と1)その前後におかれるポーズとの相関や、2)卓立レベル(ピッチ強勢と音声パワー増の両方が用いられるのか、どちらか一方しか用いられないのか)との相関があるが、分析に含めることのできた打ち消し「ーない」の個数が個人ごとでは少なすぎるため、本論考では考察を控え、継続検討課題として今後の研究に委ねることにした。

表 3

同一アクセント句内における他要素へのフォーカルプロミネンス：

FT Phase 対 Non-FT Phase

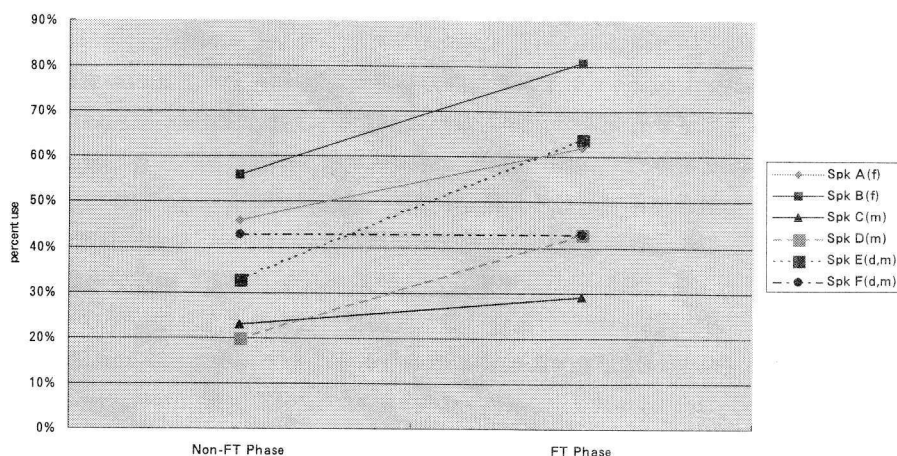
	Non-FT Phase	FT Phase	分析事例数
Spk A	46% (26/56)	62% (16/26)	82
Spk B	56% (58/103)	81% (17/21)	124
Spk C	23% (23/140)	29% (4/14)	154
Spk D	20% (1/5)	43% (3/7)	12
Spk E	33% (2/6)	64% (14/22)	28
Spk F	43% (9/21)	43% (3/7)	28

グラフ 5

同一アクセント句内における他要素へのフォーカルプロミネンス：

FT Phase 対 Non-FT Phase

Intra-speaker Variation in Use of Other Focal Stress: Non-FT vs. FT Phase



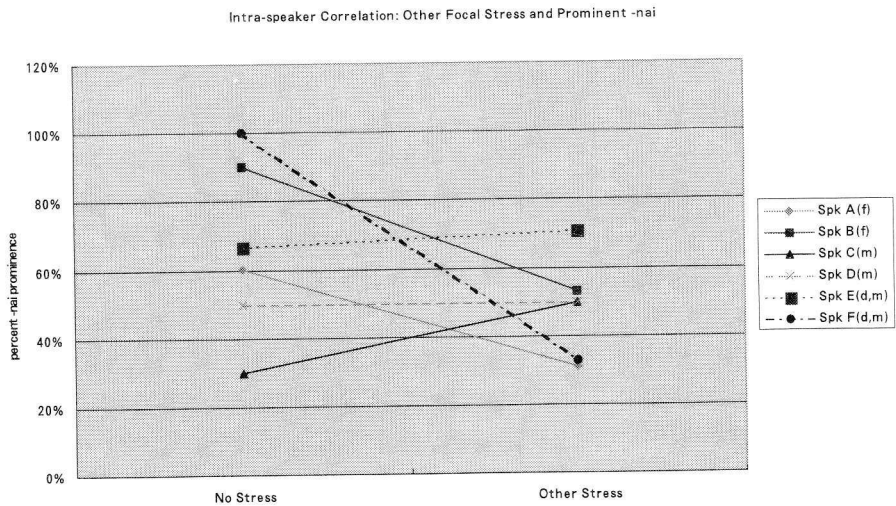
意見衝突の深刻な局面（FT Phase）において、女性管理職は二名共に、他要素へのフォーカルプロミネンスを積極的に活用していることが分かる（Spk A [female]：46%→62%；Spk B [female]：56%→81%）。男性話者4名のうち二名（男性管理職Spk C [male]：23%→29%；討論参加者Spk F [debate, male]：43%→43%）は使用割合に大きな変化はないが、残りの二名（男性管理職Spk D [male]：20%→43%；討論参加者Spk E [debate, male]：33%→64%）は女性管理職のパターンと同様の変異を見せている。⁷

では、このFT Phaseにおける他要素へのフォーカルプロミネンスの意義とは何なのか、これらの個人内変異を踏まえた上で、さらに違う角度から考察を加えてみたい。グラフ6では、特にFT Phaseに注目をして、否定「～ない」の卓立と同アクセント句内における他要素へのフォーカルプロミネンスの「併用」の様を、話者ごとに図示してみた。

⁷後者の男性話者二名によるFT Phaseでの割合の増加は、分析に含めた事例数の少なさから派生した逸脱的な結果であると推定しているが、この点について今後さらに事例数を増やした上で再分析を行うつもりである。

グラフ 6

FT Phaseにおける卓立「-ない」と他要素へのフォーカルプロミネンスの併用：個人内変異



左軸（No Stress）には、同アクセント句内の他要素にフォーカルプロミネンスが顕著ではない環境における否定「-ない」の韻律的卓立の割合を、右軸（Other Stress）には他要素へのフォーカルプロミネンスが確認された環境での否定韻律卓立の割合、つまりそれら2種類の卓立の「併用」の割合が見てとれる。反証例が一つ（Spk F[d, m]）あるものの、全体的な変異パターンとして確認できるのは、意見衝突の深刻な場面において女性管理職（Spk A[f], Spk B[f]）は、否定「-ない」の韻律卓立と他要素への韻律卓立を相補分布的に活用していることであり、一方、同様の状況で男性話者（管理職）はそのような使い分けをせずに併用するか（Spk D[m], Spk E[d, m]）、他要素の卓立も率先して用いる傾向にある（Spk C[m]）ということである。

これらの結果から、部下との意見対立に直面した女性管理職の巧みな「ジレンマ」克服のストラテジーが読み取れる。即ち、「婉曲的に話さなくてはならない」という社会文化的価値観の重圧から、否定命題（打ち消し「-ない」）自体の韻律を抑制することで、否定行為そのもののトーンを和らげるという消極的面子維持志向の操作を行う一方で、その修繕策として、同じアクセント句内の他要素への卓立を利用しながら、発話全体の威圧的「語気」を失わせない韻律的ストラテジーを講じているわけである。

IV. おわりに

本研究の研究成果からいくつかの重要な社会言語学的知見が得られることと思う。第一に、本研究では、自然発生的談話に見られる否定表現（打ち消し「-ない」）の韻律変異に着目し、言語共同体の本質である「規則性を内包する多様性」（systematic heterogeneity）を実証的に明らかにすることができた。20%から100%までにも及ぶ巨大なマグニチュードの卓立変異に潜む規則性を解明する鍵は、微視的には、韻律と使用コンテキストとのダイナミックな相互作用にある。即ち、否定行為各々の相互作用的意義に関する話者自身の瞬間ごとの判断である。

また、巨視的には、生活場面ごとのレジスターとの相関にある。我々の日常生活に当りに存在する様々なレジスターごとに、話者はその相互作用的特性に適合した言語調整を行っているという、言語共同体成員の多様かつ整然たる言語生活が明らかになった。さらには、話者属性に基づいた社会的な小集団 (subgroup) 特有の変異事象を明らかにすることにより、当該言語共同体の「異相複合的」現実が浮き彫りになったものと思う。これらの研究成果は、従来の「内省」志向の社会言語学的研究がこれまで構築してきた日本社会の「等質的言語共同体」像を真っ向から否定する実証的論拠を提示できたという点で意義深い。

第二に、本研究で試みた韻律研究とコンテキスト重視の談話研究のインターフェースにおいて、当該言語変異の起因として、認知的要因を上回る相互作用的・社会的要因の優位性が明らかになったことは、使用コンテキストからの情報を無視した包括的言語理論の構築は有りえないことを示唆するものである。また、社会言語学的ジレンマに直面した女性管理職による韻律モダリティの方策的活用が明らかになったことで、昨今注目を集めている韻律のダイナミックな役割を談話の中で捉えるというアプローチの有効性が、改めて確認されたと言える。

最後に、本研究の成果は、言語変異理論自体の向上にも貢献できると考える。従来、ヴァリエーション理論は「会話参与者間要因」がもたらす変異性を軽視する傾向があった。本研究は言語変異理論の枠組みの中にありながら、コンテキスト重視の相互交渉的・話者間要因の重要性を再確認したことにより、調査者と被験者との対面インタビューからの疑似自然 (naturalistic) 談話を第一次的分析資料としてきた従来のアプローチの欠点を是正する端緒となりうる (Bell, 1984; Rickford & McNair-Knox, 1994)。従って、本研究成果は言語変異理論のより一層の研磨に繋がるという点で意義深いものであると言える。

[謝辞]

本論考の執筆にあたり、貴重なフィードバックをいただいた北海道社会言語学研究会の皆様、初稿原稿に目を通して下さった片岡邦好、松川芳両氏にこの場をかりてお礼を申し上げたいと思います。

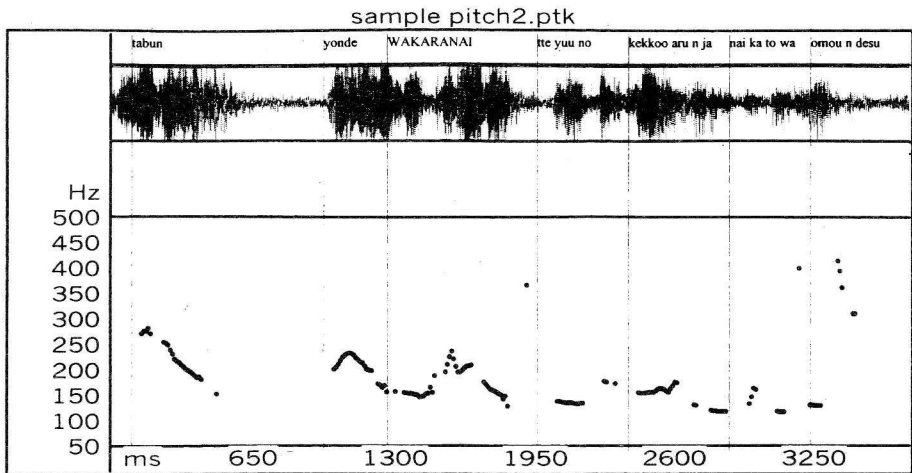
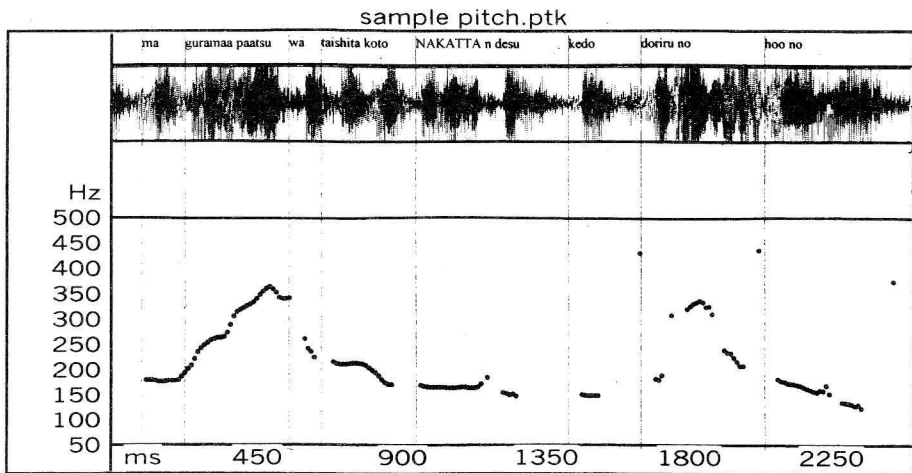
[引用文献]

- Bell, A. (1984). Language style as audience design. *Language in Society* 13:145-204.
- Biber, D. (1988). *Variation Across Speech and Writing*. Cambridge: University Press.
- Biber, D., & Finegan, E. (1994). *Sociolinguistic Perspectives on Register*. Cambridge: University Press.
- Brenneis, D. (1988). Language and disputing. *Annual Review of Anthropology* 17:221-37.
- Brown, G. (1983). Prosodic structures and the given/new distinction. In A. Cutler & R. Ladd (eds.), *Prosody: Models and Measurements*. Berlin: Springer-Verlag. 67-77.
- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Couper-Kuhlen, E. & Selting, M. (1996). *Prosody in Conversation*. Cambridge: University Press.
- Eckert, P., & McConnell-Ginet, S. (1992). Think practically and look locally: Language and gender as community-based practice. *Annual Reviews of Anthropology* 21:461-490.
- Finegan, E. (1994). *Language: Its Structure and Use*. Harcourt Brace: New York.

- Hirschberg, J. (1990). Accent and discourse context: Assigning pitch accent in synthetic speech: The given/new distinction and deaccentability. *Proceedings of the 8th National Conference on Artificial Intelligence*. Cambridge, MA: MIT Press. 952-57.
- Ishida, T. (1984). Conflict and its accommodation: Omote-Ura and Uchi-Soto relations. In E. s. Krauss, T. P. Rohlen, & P. G. Steinhoff (eds.), *Conflict in Japan*. Honolulu, HI: University of Hawaii Press. 16-38.
- Jones, K. (1995). Masked negotiation in a Japanese work setting. In A. Firth (ed.), *The Discourse of Negotiation*. Pergamon. 141-58.
- . (in press). *The Myth of Harmony: Conflict Discourse in Japanese*. Norwood, NJ: Ablex.
- 寿岳章子 (1979) 『日本語と女』岩波新書99
- キャンベル、ニック (1997) 「Tones and Break Indices (ToBI)システムと日本語への適用」
日本音響学会誌53巻3号、223-229
- Labov, W. (1972). *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 真下三郎 (1969) 『婦人語の研究』東京堂
- Mori, J. (1999). *Negotiating Agreement and Disagreement in Japanese*. Philadelphia: John Benjamins.
- 中右実 (1999) 「モダリティをどう捉えるか」月刊言語28(6):26-33
- 仁田義雄 (1999) 「モダリティを求めて」月刊言語28(6):34-44
- Niyekawa, A. M. (1984). Analysis of conflict in a television home drama. In E. S. Krauss, T. P. Rohlen & P. G. Steinhoff (eds.), *Conflict in Japan*. University of Hawaii Press. 61-84.
- Nooteboom, S. G., & Kruyt, J. G. (1987). Accents, focus distribution, and the perceived distribution of given and new information: An experiment. *Journal of the Acoustical Society of America* 82:1512-24.
- 音声文法研究会(編)(1997) 『文法と音声』、くろしお出版
- 音声文法研究会(編)(1999) 『文法と音声II』、くろしお出版
- O'Shaughnessy, D., & Allen, J. (1983). Linguistic modality effects on fundamental frequency. *Journal of the Acoustical Society of America* 74:1155-71.
- Pearson, B. (1988). Power and politeness in conversation: Encoding of face threatening acts at church business meetings. *Anthropological Linguistics* 30(1):68-93.
- . (1989). "Role-ing out control" at church business meetings: Directing and disagreeing. *Language Sciences* 11(3):289-304.
- Prince, E. (1981). Toward a taxonomy of given-new information. In P. Cole (ed.), *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press. 223-56.
- Reynolds, K. A. (1990). Female speakers of Japanese in transition. In S. Ide & N. H. McGloin (eds.), *Aspects of Japanese Women's Language*. Tokyo: Kuroshio. 129-144.
- Rickford, J. R., & McNair-Knox, F. (1994). Addressee- and topic-influenced style shift: A quantitative sociolinguistic study. In D. Biber & E. Finegan (eds.), *Sociolinguistic Perspectives on Register*. Oxford: Oxford University Press. 235-276.
- Schegloff, E., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). Preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language* 53: 361-82.

- Takano, S. (1997). *The Myth of a Homogeneous Speech Community: The Speech of Japanese Women in Non-traditional Gender Roles*. Ph.D. Dissertation, The University of Arizona.
- _____. (2000a). Re-examining linguistic power: Strategic uses of directives by professional Japanese women in positions of authority and leadership. Manuscript, Hokusei Gakuen University.
- _____. (2000b). The myth of a homogeneous speech community: A sociolinguistic study of the speech of Japanese women in diverse gender roles. *International Journal of the Sociology of Language* 146: 43-85.
- Tannen, D. (1990). *You Just Don't Understand*. New York: Ballantine Books.
- Troemel-Ploetz, S. (1994). "Let me put it this way, John": Conversational strategies of women in leadership positions. *Journal of Pragmatics* 22:199-209.
- Yaeger-Dror, M. (1985). Intonational prominence on negatives in English. *Language and Speech* 28:197-230.
- _____. (1996). Register as a variable in prosodic analysis: The case of the English negatives. *Speech Communication* 19.
- _____. (1997). Contraction of negatives as evidence of variance in register-specific interactive rules. *Language Variation and Change* 9: 1-36.
- _____. (1999). Register and prosodic variation, a cross language comparison. Manuscript, The University of Arizona.
- Yamada, H. (1992). *American and Japanese Business Discourse: A Comparison of Interactional Styles*. Norwood, NJ: Ablex.

[付録]



[Abstract]

Exploring Prosodic Modality in Japanese Disagreement from a Perspective of Register

Shoji TAKANO

This paper accounts for rule-governed systematicity underlying prosodic variation in Japanese disagreement. Analysing the apparently chaotic state of variable prosodic prominence attached to the Japanese negative *-nai* in naturally occurring interactions, this variationist research finds systematic correlations with such sociolinguistic factors as the degree and types of face-threateningness of individual acts of disagreeing, the interactional dimensions of register, and gender-linked subgroups. Prosodic variation in expressing negation is interpreted as the consequences of the speaker's strategic manipulation to overcome potential threats to the interlocutor's 'face want' in the immediate context of use. The theoretical significance of the outcome includes: 1) empirically revealing the speech community's "systematic heterogeneity" as its essence, which has been masked due to heavy orientation to relatively homogeneous native introspection and the standard Tokyo dialect as the exclusive target of analysis in prior studies in Japanese sociolinguistics; and 2) contributing to further advance of research on the interface between prosody and discourse where intimate but dynamic relationships can be identified between prosodic variation and interactional contexts.